

## V バラエティーが成り立つ公共空間

### 1. テレビ本来の姿としてのバラエティー

気がつきました？

前の章の最後の方で話題にしたのは、昔のバラエティーはよかった、などということではない。そんなことでは全然なくて、バラエティーの送り手と受け手の関係の話である。マス・コミュニケーションとは何か、という問題である。

昔の視聴者は、いまのように新聞のラテ欄にテレビ局の電話番号など書いてなかったから、番組のあれこれについて、簡単に局に電話したりなどしなかった。もちろん、まだBPOの視聴者対応の窓口などカゲもカタチもなかった。それでいながら、テレビと、とりわけバラエティー番組と活発なやりとりをしていた。

それは、電話やファックスやメールがなくても成り立つ、バラエティーと視聴者のあいだの意思疎通である。送り手がギャグやコントやドタバタで、あるいはオシャレなトークやジョークに包んで送ったメッセージ、けっこうキツイ毒の入ったメッセージを、受け手はたしかに受け取って、面白がったり、驚いたり、気持ちを高ぶらせたりしていた。「ウケる」とは、このコミュニケーションの成立のことであった。

\*

しかし、ここで見落としてならないことは、これが送り手と受け手、1対1のあいだで完結する、閉じたコミュニケーションではなかった、ということである。

視聴者一人ひとりの背後には当時の世の中の仕組みがあって、そこには理不尽な権威やうざったい社会通念、封建的な常識や意味を失った秩序等々がぎっしり詰まっていた。王様は雲の上にいただけでなく、その意を汲んだ種々雑多な家来や手下が俗な世間のあちこちにいたということである。

おそらく誰もが、そういうものに従って暮らしていれば、波風も立たず、楽なことを知っていながら、「なんだかなー」とか、「そればかりでも面白くないなァ」くらいのことは考えていたにちがいない。

ここが人間の不思議というか、一筋縄ではいかないところである。どういうわけか人間は、ひとつところには留まっていない動物であるらしい。

バラエティーは、直接的には視聴者に向かって語ったり、演じたりしながら、間接的にはそのうしろにある世の中の仕組みと、そこに付随するもろもろの権威や通念を揶揄し、笑い飛ばし、おちょくっていた。視聴者に、視聴者一人ひとりを取り巻いている現実の表層を引き剥がしてみせ、見てくれとはちがう現実の相貌、変わり種の現実を見せていたということでもある。

当然、おちょくられた側からは、「子供に悪影響を与える」「公序良俗に反する」等々の反発もあった。反発も批判もコミュニケーションの一種であるから、当時のバラ













